

---

# 馬鹿と書いて王子と読む

草草

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

馬鹿と書いて王子と読む

### 【著者】

ZZマーク

N4851Y

### 【作者略】

草草

### 【あらすじ】

とある小国の中の馬鹿王子のアホな日常と想いきやその生活がまるつと変わりそうな衝撃的な事実が発覚したよという話。ノリと勢いだけ。ただの馬鹿に鉄拳制裁と罵倒を浴びせるだけの、ぱいおれんす なお話です。あしからず。

暗い部屋の中で一人ほくそ笑んでいる人物がいる。

まだ少年と言つていいあどけなさを残した顔は、近い将来この少年が誰もが認めるような容姿になることを窺わせるには十分だつた。その笑みの種類が例え”ほくそ笑む”であつても、絵になるような状態である。

そのとき。どんーー！という衝撃が部屋を襲つた。

少年はその音にびくつと過剰に反応し、音源であるドアを振り向いてすごい勢いでドアと距離を置いた。そりやもつ、一旦散に。暗いから何回か物に躊躇ながら。

いや、ドアと呼ぶのに相応しいかは分からなかつた。

あいつたけの家具で厳重にふさがれたドアはもはやドアとしての機能を失つており、少年はもうそのドアを使う気など無かつた。むしろ、使いたくなくてそうした。開かないでお願ひ、というのが心中である。

「おーうーじーーー？」

そのドアが。みしり、みしりと音を立てて少しづつ、少しづつ開かれようとしている。

そしてドアに向づから聞こえてくるドスの効いた声。その声に冷や汗がだらだらと流れた。

いやいやいやあり得ないだろ。いくらなんでもこのドアは開きっこないだろ。落ち着け自分落ち着け自分。あーもうこれってどんな

ホラーだよー？

必死に少年が自分を奮い立たせる間も、ドアが嫌な音を立てる。

「王子？ 何かドアが重いんですけど？ 開けてくださいよ王子。楽しい楽しいお勉強の時間ですよー？」

「きつとドアがリオのこと嫌いなんだよ。いやいや実に残念だね。ほらこの通り僕部屋から出られないし？ これはもう、神様が願い叶えてくれたから」『自宅警備員』になるしかないよね。といつ訳で諦めたほうがいいよリオ」

少年が勇気を振り絞つてドアに向かつて言つ。

ドアは何回か音を立てた後、沈黙した。どうやらドア向こうの人も今度、ばかしは諦めたようだ。

それを確認した後、少年の体は歓喜で震えた。

「ふふふふ。やつたぞ！ 遂にこの日が来たんだ！！ あの人間とは思えない暴力女から僕は逃げ切つたんだ！！ ふははははざまーみやがれ愚民ども！ 一僕は遂に念願の『自宅警備員』になり2次元のおんにやの子たちとうつふふきやつときや生きに明け暮れてやるんだ！ あーはははははははー……！」

その雄叫びは、ビリおおおおおーーーーーーーーーーーーーーとこう轟音によつてかき消された。

ドアは木つ端微塵に吹つ飛び、ドアをドアたらしめなかつた家具たちはもはや原型をとどめていない。そして明るい廊下の光が散々たる部屋の様子を照らしていた。

そんな部屋の入り口に仁王立ちをする人物が一人。

逆光によつて少年からはその顔の表情は分からなかつた。しかし想像が安易に出来てしまつて、少年は冷や汗どころか傍目にも分かるようにぶるぶると体を震わせる。

その人物から、先程より一段階アップした地獄から響くような声が發せられる。

「だ～れ～が～”暴力女”だつてえ？”自宅警備員”がなんだつてえ？」

「い、いえ、そ、それは…………」

「勉強の時間だつつてんだろ？が何部屋にひきこもつて”うつふふきやつさきやきや”だこの万年頭お花畠野郎人の話聞いてんのかこのどアホ今日こゝそ世界に不要なそどたまかち割つてやんからな覚悟しそひやああああああ

「…………」

逃げよつとしたところ首根っこを掴まれ。がくがくがくゆさゆさゆさと揺らされ。容赦ない拳が降つてきて。蹴られ、殴られ、家具が散乱している中に放り投げられ。

鬼！～鬼がいるうううううう～～～～

少年は心の中で絶叫した。

ソレイユ王国は大陸の東南にある小さな国だ。

国、王家と言えば聞こえはいいが、如何せん各単語の前には”弱小”の二文字が煌々と輝いている。

面積、わずか160平方キロメートル。海と山に囲まれて天然の要塞なんて言われるが、どこが?という感じである。

海と言つても崖であり、海に出ることはとてもじゃないが望めない。海産物?何それおいしいの状態である。険しい山のお陰で他国との物流も困難。諸々の自給率はほぼ100パーセントだ。さらには面積の半分以上をお山様にもつてかれていた。

「敵に周り囲まれたら簡単に降伏するよね。自分から袋のネズミ状態になってるよね」なんていう指摘は本当に笑えない。まあ、そこを笑うのがソレイユ国民だが。良いのか悪いのかは別にして。

人口、多めに見積もって3万人。貴族も一応いるが、一般市民とほぼ変わらない生活を営んでいる。身分制度などあっても無いのに等しい。それでもあるのは、「あつたほうが格好いいから」という何とも言えない理由によって。どこまでマイペースなんだこの国。

それでも王家は割とすこかつたりする。先々々々代くらいは他の列強を相手にブイブイ言わせていたというし、何かすこい血も引いているそうだ。どうすこいのかは知らないが。

まあ、要はそれだけ。

最近の王様は皆”賢王”と呼ぶに相応しく、王家らしい威厳もあるが野心は皆無。ひたすら民思いという素晴らしい方々ばかりであり、世界がどうこう言う人達ではなかつた。民にとつては自慢の王なのだが、消極的なその姿勢は他国にバカにされがちである。

国のかなたや魅力の少なさ、王家の存在感の薄さによって、世界を震撼させた先の大戦にも参戦していない。理由は完璧に他国に忘れ去られていたことにある。

満身創痍な他の国には、その後ねちねちと暫く嫌味を言われたらしい。王様は知らぬ存ぜぬでしうばつくれたといつ。ちなみに当代の王様だ。王様すげー。

その王様の子供であり第一王子であるのが、今リオの目の前にいる人物キミト・クリル・フォルセウスだ。例え「暴力反対暴力反対」僕は君のサウンドバックではなく高貴な王家の間でありこんな扱いは万死に値する……しくしくしく首痛い……」なんて首をさすりながら亥いていようが、リオにほこほこされて包帯にぐるぐる巻かれていようが、残念なことに王子だ。

ソレイユ国民の特徴である黒髪黒目。その色に一番映えるような顔をその首にはのつけており、王家として外見を見ればぐうの音も出ない。あくまで見た目だけは。

問題は中身。

一度口を開けば「僕をお嬢さんにしてください！」と手当たり次第女性に向かつて求婚。この国に王子に求婚されていない女性はほとんどないだらう。

勉強はサボる、剣術はサボる、メイドの着替えを隠れ見る、セクハラはする、どこから採つてきたのか分からぬ虫を部屋に放す、おやつの時間だけこつそり顔を出す、等々。

最近は「僕は自宅警備員という素晴らしい職に就く！！」なんて宣言して部屋に閉じこもり、先程の乱闘をリオと繰り広げた。

何でここまで馬鹿が出来上がったのかはこの国の七不思議の一つだ。

「キミト王子、いい加減にしてください。何が『血色警備員になる』ですか。十分警備員、とこりうか衛兵はいますし、王子のそれは完璧に”ひきこもり”とこりうやつです」

「何を言つかりオ！ ”ひきこもり” といつ単語がマイナスイメージしかないから」その”自宅警備員”といつ単語だらつ

つまりお前はひきこもり宣言してた訳か。

すみません反省してます」めんなさい首だけは止めて。

先程から何だその私が暴力女みたいな言い方は。はあ、とリオは深い、深い溜め息をついた。

「…………あのですね。言いたくはなかったのですが、民が王子のことを何と言つてこむのか存じないのですか？」

「だつたら君こそどうなのさ。巷では貧乳萌えの奴らに人気があると聞いているがそれは本当か。どれどれ僕が貧乳の名に相応しいか確かめてみよ」

「黙りやがれこの年中発情期男！！そのぶらさがつてゐモノ使い物にならないよにして欲しいか！？ああ！？」

どん、と叩かれた机は内側にへこみ。

キミトが少し動かした右手はそのまま停止し。

…………がくがくがくがくぶるぶるぶるぶる

「…………リ、リオさん、言葉遣い言葉遣い！」

「あら失礼。……いいですか。今までお心を痛めると思つて書つて  
ませんでしたが、今市井の間では”馬鹿”と書いて”キリトモノ”  
と読むそうですよ」

「フムフム。つまり”本氣”と書いて”マジ”と読む原理と一緒に  
わけか。かつといへ、さすが僕ちん。何にもしていのにもう  
一つ名が付くなんて、いやあ、僕ちんの人気さを窺わせますな」

「やうですね格好いいですね素敵ですね。何でも、今では”馬鹿”  
は王子にしか使われない言葉だそうですよ。他に馬鹿と言える人が  
いても、王子の上を行く人がいないので”馬鹿”だけで王子のこと  
を語ることが可能のようです。素晴らしいですね素敵ですね涙がで  
ますね。つまり”馬鹿”は王子の為に存在している言葉なのです。  
『あの馬鹿は今日もや～』『あ～、あの馬鹿ね』といつよつこ。せ  
つかくだから私も使わせて頂こつと思ひます。ね、馬鹿？」

「あはははは～。…………泣いていい？」

「ダメです。泣く前に少しば強して民に馬鹿と言わせなによつて  
してくださこ！」

勉強なんてしていられるかー！  
うつさこわつせとやれやー！！

「二人とも相も変わらず仲が良いね～」

今までこ、元気なうとしたところ。そつて聞いて部屋に入  
つてきたのは見田麗しい青年だった。

御伽噺からそつくりそのまま出てきたような典型的な王子様。顔よし頭よし運動神経よしといつ、どこをどつどつとも金太郎飴のように完璧な人物。それがソレイコ王国第一王子、フミト・テラ・フォルセウスその人だ。

唯一そこに欠点的なものがあるとすれば、その髪色。王家では本当に珍しいことに、黒色ではなく茶色をしている。噂によれば”先々々々代の王妃様の叔父さんそのまた叔父さん似”らしい。

そんな民の理想の王子様であるフミト王子と、代名詞が”馬鹿”であるキミト王子の人気は天と地。月とすっぽん。

…まあ、キミト王子も逆にその馬鹿さ加減で親しみが湧くというか、何というか。決して民にないがしろにされてはいない。馬鹿にはされているけれども。

そんな御方が第一王子なので、まあ、第二王子の素行もそこまで問題にはならない、のかなあ？温かく、温かく見守っている次第である。「いや、本当にあの馬鹿が第一じゃなくて良かつたよね。もしそうだったら国の将来も不安だよね。うんうん。ホント助かつた」というのがこの国の共通認識だ。

それでも。それでも王子なのだこいつは。

リオは王家に少なからず尊敬の念を持つている。他国が何と言おうが、この国の王家は素晴らしいのだ。

キミト王子にも王家の人間として、是非とも誇りを持てるような人になって欲しい。むしろ、なれ。汚点になるなよこの馬鹿。といふ思いで、誰もやらない王子の教育係兼世話係といふ名の貧乏籠をひいているのだ。毎日それはもつ必死である。

「フミト様も何とか言つてくださいー！お前は王家の恥であつこの

国に煌々と輝く汚点であり死んだほうがこの国の為と世界の為だ『つてぐらりと言わないところの馬鹿分かりっこないんですよ！私は立場上やここまで大それたことは言えませんが……そんな心で常に思つてることを口に出して言えませんが……』

「いやいやいや十分言つてるじゃん！？心の声だだ漏れじゃん！？もーいい！…僕はきっと王家じゃないんだ病院で取り違えられたんだ！僕の本当のパパとママはそれはそれは綺麗で僕にベタ惚れで甘いんだ！待つてパパママ今本当の息子プリティ キミトが会いに行くからね…………」

「ほう…じゃあ行くか？パパママの所へ。今は丁度執務室にいるはずだよなあ？今の言葉お一人の前でもう一度言つてみつかあ？ああ？」

嘘です言葉の綾ですいやー！行きたくないいー…………  
今日こそその腐った脳みそ再構成してこいやあああ…………

ぎやーすかぎやーすか

基本的にこの国の人はおおらかとこうか何というか。見慣れた光景というか何というか。

取つ組み合いで今にも始めそうな二人を見ても動じず、本当に仲が良いよね、とにかくこするフミトが大物な訳でもない。いや、大物な訳もあるか。

フミトは「そうだ嘗つてみたんだ」とぽんと手を打つ。

「あ、そつそつ。その話題について実は話があるんだ」

「「めじすかー?」」

「「わーんやつぱつ僕は違つ家の子なんだーーしへしへしへ……ひやつほーにこれで勉強・剣術からお セ ラ バ 待つてろ薔薇色ヒモ生活ー!」

「今までこれでも一応王子だから泣く泣く己の良心を最大限にまで引き上げて最後までは自制していましたがそれも全て意味のないことであつこれからは今までの分まで牛乳に浸されたボロ雑巾のようにしてもいこつてことですか!?」

「…………前言撤回!…おこーおま今は嘘でも偽りでも家族と言つてーー血に繋がつてゐつて言つて!…じやなきや 確実に殺られつぐえ」

「じゃーかましいわボケ!今までよべも好き勝手やつてくれたな分かってるんだらうなああー!…!…それあわあわあその耳がつぽじつて死刑宣告でも聞けや!」

あつぱ、や、せ、め、べ、び、べぢしまつ…!  
がくがくがくおもやさゆり

そんな修羅場を意に介せずあははーと傍観しながら、フミトはアリフ世間話のように続ける。それはもう、日常会話のよう。

「血、繋がつてないんだよね。

俺

ひいいおおおお助け、  
がくがくがくゆさゆ、

ピタリと双方の動作が止まる。

息ぴったりだなーとフミトは感心した。

「…………はい？」

またもや息ぴったりにぐりんと首を回して一人揃つてフミトに注目する。

思考回路が正常に戻つていないリオに代わつて、引きついた笑みを浮かべたキミトがおそるおそる尋ねた。

「えつと、おにーさま。それほどうこう

「だから、俺が貰われつ子つて話

・・・。

「し、妾腹の出とかそういう?」

「いやこや。正真正銘王家じょなこよ。城の前に捨てられてたから、  
拾つて貰つたんだ」

・・・。

「…………冗談?」

「本気。その証拠にほら、髪の毛一人だけ茶色でしょ?」

それは先々々々々代の王妃様の叔父さんのそのまた叔父さんの遺伝では?

一斤の信憑性もなにじもんそれ。よくみんなそん  
な噂信じるよ。ね。

……ですよね。

「ここに説で、おめでとうナリ。お前は最初から第一王位継承者だ」

•  
•  
•  
○

「 は あ

! ?

(後書き)

息抜き作品です。

どこかでみたことあるような感じなのは、『愛敬?』…私がそれだけそれ好きってことですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4851y/>

---

馬鹿と書いて王子と読む

2011年11月17日19時07分発行